

協働的な学びを充実させるための小集団交流を活かした授業づくり

～ 話すことの高めるための授業実践 ～

大垣市立北中学校 教諭 豊島 沙耶佳

概要

今日的な課題と生徒の実態から、これからの時代を生きる子供たちは協働的な学びを通じて、主体的に学習を進めることで、生きて働く外国語の力を身に付けることができると考えた。そこで、本研究では第2学年 Unit 4 と Unit 5 の学習を通じ、小集団での学習を生かしながら英語科の4つの技能の内、「話すこと」の力を高めるための授業実践を行った。研究内容は「主体的に課題解決に向かうための指導過程の工夫」と「考えを深める学習活動の工夫」とした。「主体的に課題解決に向かうための指導過程の工夫」においては、意図的な小集団の設定や単元の終末を意識した目的・場面・状況の設定を行ったことで、生徒が小集団での交流を通して主体的に単元末の課題に向かう姿勢が見られた。「考えを深める学習活動の工夫」においては、生徒に「できた・分かった」を実感させるための活動や ICT を活用した授業展開及び対話活動を行ったことで、生徒が自身の変容を実感しながら話すことの力を伸ばすことができた。

1. 主題設定の理由

(1) 今日的な課題から

中学校学習指導要領（平成29年）では、これからの社会で求められる資質・能力を育むために主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の視点からの指導過程の改善を求めている。これは、子供たちがこれまで気づかなかったことに気づき、考えもしなかったことにまで考えを深め、そこで得た力を将来に繋げるために「何を学ぶか」という点に加えて「どのように学ぶか」という授業改善のために文部科学省が提唱した文言である。また、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（令和3年）の中で多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と子供たちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」が提唱された。この答申の総論の中に、子供たちに求められる資質・能力に関して以下のように示されている。

次代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力としては、文章の意味を正確に理解する読解力、教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解

を生み出す力などが挙げられた。

このように求められる資質・能力があると同時に「個別最適な学び」と「協働的な学び」が提唱された背景に、次のような課題がある。

我が国の教師は、子供たちの主体的な学びや、学級やグループの中での協働的な学びを展開することによって、自立した個人の育成に尽力してきた。その一方で、我が国の経済発展を支えるために、「みんなと同じことができる」「言われたことを言われたとおりにできる」上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、「正解（知識）の暗記」の比重が大きくなり、「自ら課題を見つけ、それを解決する力」を育成するため、他者と協働し、自ら考え抜く学びが十分なされていないのではないかという指摘もある。

現在の教育において1人1台のタブレット端末使用が当たり前になっており、子供たちは自らの学びの手段を自由に選択できるようになっている。これが、個別最適な学びである「指導の個別化」、「学習の個性化」につながっていると感じる。しかし、その選択は子供たちが「自ら課題を見つけ、それを解決する力」を育むためではなく、「正解（知識）の暗記」のために使われることが多いと感じる。また、現在

の学校教育において「対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力」や「自ら課題を見つけ、それを解決する力」を育成するための授業実践は多くはないと感じる。外国語教育においては多様な他者との対話を通して様々な考え方を知ったり、自分の考えを伝えたりする対話的な学びが必要不可欠であり、その学びを通して先に述べた資質・能力が育成されるのではないか。先述の答申においても以下のように示されている。

「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。

(2) 生徒の実態から

第2学年の生徒121名に英語に関するアンケートを実施した。「英語の学習は好きか」という質問をしたところ、全体の51%、半数の生徒が「好きではない」と回答した。そのように答えた理由として多く挙げたのが、「自分が伝えたいことをどのように伝えたらいいかわからない」というものだった。また、アンケート内で英語の4技能、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの中で最も苦手意識を感じるものは何かという質問をしたところ、全体の約45%の生徒が書くこと、約30%の生徒が話すことと回答した。このように自分の思いを伝えることに苦手意識をもつ生徒だが、英語の授業を通してどのような力を身に付けたいと考えているか質問したところ、将来自分自身が海外に訪れる際や、日本を訪れた外国人観光客と英語で会話をしたいと考えている生徒が多く、特に話すことの力を身に付けたいと考えている生徒が多いことが分かった。

以上の点から、これからの時代を生きる子供たちが苦手意識を感じているとともに、身に付けたいとも感じている話すことの力をより実践的な対話活動を通して高めるための授業改善が必要であることが分かった。そこで、小集

団での対話活動を活かした協働的な学びを通して子供たちが身に付けたいと感じている力を育みながら、子供たちに求められる資質・能力を育むために、次のような仮説を立てた。

2. 研究仮説

意図的に編成した4人以下の小集団とその小集団を活かした指導過程及び協働的な学習活動を実践することで、主体的に対話活動に向かいながら、多様な考えを自らの表現に活かし、話すことの能力と意欲を高めることができる。

3. 研究内容

研究内容 (1)

主体的に課題解決に向かうための指導過程の工夫

- ① 多面的・多角的に考えを形成するための小集団の設定
- ② 単元の終末を意識した目的・場面・状況の設定

研究内容 (2)

考えを深める学習活動の工夫

- ① 本時の学びを確かめ、「できた・分かった」を実感させるための活動の工夫
- ② ICTを活用した授業展開及び対話活動の工夫

4. 研究実践

今回は、第2学年の海外との生活習慣や文化の違いが題材になっているUnit4とユニバーサルデザインが題材になっているUnit5の2つの単元で研究を実践する。

研究内容 (1)

主体的に課題解決に向かうための指導過程の工夫

- ① 多面的・多角的に考えを形成するための小集団の設定

小集団学習を行う目的は、英語に対して苦手意識を感じている生徒が小集団での交流を通じて、様々な考え方や表現を見つけ、自分の言葉で自分の考えや思いを相手に伝えるためである。そこで今回の実践では小集団を編成する際に、①小集団内でコミュニケーションを図る

ことができる程度の間関係が成り立っているか、②小集団ごとに大きな学力差が生じないかの2点に留意して教員が3人から4人の小集団を各クラス8グループずつ編成した。

まず生徒同士の間関係を重視して、生活班を基準とした。次に、学力差を生まないために期末考査の点数から75点以上の生徒をA、45～75点の生徒をB、45点以下の生徒をCとして各小集団の中にA、B、Cの生徒がそれぞれ一人以上置かれるように生活班のメンバーを入れ替えた。学級によってはAの生徒が少なかったためB、Cの生徒だけで小集団を構成した。生活班をもとにしたことで子供たちの中で話しやすい雰囲気が生まれ、会話がしやすくなった。一方で似たような考えをもつ生徒が集まっていたため、なかなか意見が広がらない様子も見られた。

そこでUnit5ではUnit4で用いた小集団を2つのグループに分けて、学力も踏まえて他の小集団の2人、もしくは1人と組み合わせた。これにより、Unit4に比べて色々な意見を出す小集団が増えた。一方であまり話をしたことがないクラスメイトと同じ小集団になった生徒はお互いに話をしづらく、Aの生徒が1人で課題解決に向かう姿もあった。

Unit5の単元終了後、小集団に関する感想を生徒からも集めたところ、以下のような意見が挙がった。

【良かった点】

- ・生活班と変わらない部分があり、会話がしやすい
- ・分からないことがあったらすぐ聞けて質問しやすい
- ・分からないことが分からないままで終わることが減った
- ・話し合いがうまくできるようになった
- ・自信をもって発表できることにつながった
- ・自分では思いつかなかった表現やアイデアが増えた
- ・話すことへの苦手意識が減った

アンケートを通して英語が苦手な生徒だけでなく、英語を得意とする生徒も下線のように感じていることが分かった。また、このアンケート内で聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの4つの技能の中で特に力が伸びたと感じ

るものは何かという質問をしたところ、42%の生徒が話すことの力が伸びたと感じていた。一方で以下のような課題点も挙げられた。

【課題】

- ・話せない人がいる
- ・できる人に頼ってしまう
- ・自分で考えない人がいた
- ・生活班なのでメンバーがいつも同じ
- ・欠席が多い時に困った

② 単元の終末を意識した目的・場面・状況の設定

子供たちに提示する単元の目標(Unit Goal)の中に目的・場面・状況を設定し、Unit4の単元の初め、オリエンテーションの時間に以下のように提示した。

Unit4 Unit Goal:

北中学校に来る外国人留学生たちに、日本の生活習慣やマナーを伝えよう。

この単元では日本の生活習慣やマナーについて疑問をもつ外国人留学生が日本で気持ちよく生活できるようにするために、日本の生活習慣やマナーについて伝える動画を事前を送る、と補足説明をした。Unit4においては教員が教科書で扱われている題材をもとに、目的・場面・状況を設定した。子供たちは終末の活動に対する見通しをもつことができ、単位時間の中でも違和感を抱くことなく終末を意識した対話活動を実施することができた。一方で「北中学校にやって来る外国人留学生」という設定は事実ではないうえに、これから起こりうる事象でもないため、「子供たちが主体的に取り組む」ということにはつながっていないように感じた。そこでUnit5では、教科書の題材も踏まえた上で、より子どもたちが学習課題を身近に感じられるようにUnit5の学習に入る前に、事前アンケートを実施した。

生徒にはまず、「ユニバーサルデザインについて知っているか」と尋ねた。知っている、どちらかといえば知っている、と回答した生徒は全体の62%だった。半数以上の生徒がユニバーサルデザインの存在は知っていることが分かった。次に「ユニバーサルデザインにはどのようなものが挙げられるか」という質問をしたところ、多くの生徒がスロープや点字ブロック

を挙げた。また、「ユニバーサルデザインはどこで多く見られるか」と質問をしたところ、最も多かった回答が病院などの医療施設、続いて多かった回答が老人ホームなどの福祉施設だった。最後に「ユニバーサルデザインはどこに取り入れられるべきか」と質問したところ、最も多かった回答は医療施設、次に福祉施設であったが、3番目に多かった回答が学校だった。学校と回答した生徒は全体の12%を占めており、多くの生徒が病院や老人ホームなどには既にユニバーサルデザインが導入されているが、学校にはほとんどないと考えていることが分かった。そこで、このアンケートをもとに以下のような単元の目標を提示した。

Unit 5 Unit Goal:

北中学校をよりよくするために必要なユニバーサルデザインについて考え、ユニバーサルデザインを知らない人にも伝えよう。

学年の半数近くの生徒がユニバーサルデザインについて知らないということと、多くの生徒が北中学校にユニバーサルデザインを取り入れるべきだと考えていることを踏まえて、北中学校をよりよい学校にするために、単元の終末に自分たちが考える北中学校に取り入れたいユニバーサルデザインについて発表することを説明した。

Unit 4に続いて、単元の終末を意識して活動に臨んだことに加えて、事前にアンケートを行ったことで、ユニバーサルデザインについてよく知らなかった生徒も主体的に課題解決に向かう姿が見られた。また、よりよい発表するにはどのような工夫を施すことができるか考え、実際に校舎を見て不便を感じる物や場所を探したり、ユニバーサルデザイン製品を探したりする生徒の姿が多く見られた。

研究内容 (2)

考えを深める学習活動の工夫

① 本時の学びを確かめ、「できた・分かった」を実感させるための活動の工夫

授業内での話すことにおいて「できた・分かった」を実感できるポイントは自分の伝えたいと思ったことが相手に伝わったという達成感を得ることができるかどうかであると考え。しかし、生徒はそもそも相手にどのように伝え

るといいのかが分からなかったり、本当に伝わったのか分からないまま授業を終えたりすることが多い。また、単位時間の中に会話を行う時間が少なかったことも生徒がそのように感じる原因であったと思う。そこで Unit 4から Unit 5の中で、教科書にある Activity を活用して以下のようなトピックで対話活動を積極的に行った。

Unit 4

Part 1 (Activity 1)	What is the advice about homestay?
Part 2 (Activity 2)	What are the things we must do in this school?
Read&Think 1	What is the advice for Lucas and Yuna?
Unit Activity	What is important in a homestay?

Unit 5

Part 1 (Activity 1)	What kind of UD do you use and why is it UD?
Part 2 (Activity 2)	Let's talk about how to use UD?
Read&Think 1 (Activity 3)	What is a good point of UD?
Read&Think 2 (Activity 4)	Why is universal design important?
Unit Activity	What design is good for Kita junior high school?

1時間の授業の中で必ず対話活動を行うことで、子供たちは、話すことへの抵抗感を減らすことができた。次に実践を進める中で、①どのような流れで、②誰と対話活動を行うか、という点に着目した。

Unit 4 Read and Think 1, Unit Activity では以下のような流れで対話活動を行った。

1. 同じ小集団内で意見を確認する
2. 同じ小集団内のペアで対話活動を行う
3. 異なる小集団のペアで対話活動を行う
4. 全体で3の対話を振り返る
5. ワールドカフェ方式でペアを変えて対話活動を行う

日本でホームステイをする前に不安を感じている外国人留学生にそれぞれアドバイスをする Unit Activity の授業を行った際に子供た

ちは1の段階で以下のような意見を出した。

- ・ニーナはベジタリアンで日本での食事を心配している。また、温泉で水着を着ることができかどうか知らない。食事についてはメニューを確認すればいいから check the menu が使えると思う。
- ・水着は着ることができないから You must not wear swimsuit. と言えればいい。
- ・食事に関しては肉を使っていない日本食をオススメしたいから、I recommend that が使える。
- ・水着以外でも浴槽にタオルを入れないこと教えてあげたいから、not put towels in the bathtub. と言えり。

小集団での確認を踏まえて2の活動では片方の生徒を外国人留学生、もう片方の生徒を自分として対話を行った。1で意見を確認し、2でその意見を伝えることで、生徒は同じ考えをもつ仲間同士、会話がしやすく感じ、安心感をもって対話活動を進めていた。一方で同じ小集団のメンバーであることから多少表現がおかしくても、何となく言いたいことはわかっていたり、うまく伝えることができない生徒がいてもそのまま流してしまう姿が見られたりした。その状態で3の活動に臨んだ際に、生徒が誤った文法や語彙を使用していた場合、それに気づくことができないまま対話活動を進めていたり、表現が難しいため異なる小集団の生徒には伝わらなかつたりする場面もあった。

そこで3の対話活動終了後に教員が全体で対話活動の振り返りを行い、多くの生徒に共通して見られる誤りを全体で確認する時間を設けた。これにより、文法や語彙のミスに気づくことができた生徒は次の対話活動でその点に注意して対話活動を行うことができた。また、複雑な表現や難しい表現はどのように言い換えることができるかを全体で確認したことで多くの生徒は全体で確認した表現を次の対話活動に活かしていた。しかし、小集団ごとに誤りは異なるため、全体交流で確認しきれないものがあつたり、全体交流によって出た表現を使うことで、生徒自身が本当に言いたかつたことを伝えられなかつたりすることがあつた。

Unit 4での課題を踏まえてユニバーサルデザイン的重要性について考える Unit 5の Read

&Think 1, 2や Unit Activity では以下のように対話活動を行った。

1. 同じ小集団内で意見を確認する
2. 同じ小集団内のペアで対話活動を行う
3. 異なる小集団のペアで対話活動を行う
4. 同じ小集団内で3の対話活動を振り返る
5. 全体で共通したミス、使える表現を確認する
6. ワールドカフェ方式でペアを変えて対話活動を行う
7. 3と同じペアで再度対話活動を行う

1から3まではUnit 4と同じ流れで行つたが、4の振り返りの中で自分の伝えたいことをもう一度確認し、3のペアとの会話でうまくいかなかつた点を再度同じ小集団のメンバーと確認することで、うまくいかなかつた点はどのようにすると伝わるのか、逆にどんな表現を使ったことで相手は理解できたのかを自分たちの力で話し合うことができた。また、グループで確認している間に教員自身もどのような誤りや不安があるのかを確認することができ、5での振り返りの中での的確な指導をすることができた。これにより、最終的な対話活動では1回目の対話活動よりも話す量や正しい表現が増え、生徒も自信をもって話すことにつながつた。また、7の活動を設定したことで子供たちが4から6の活動を経てどのように変化したのかをお互いに確かめることができ、自分たちの力で成長していったことを実感できた。

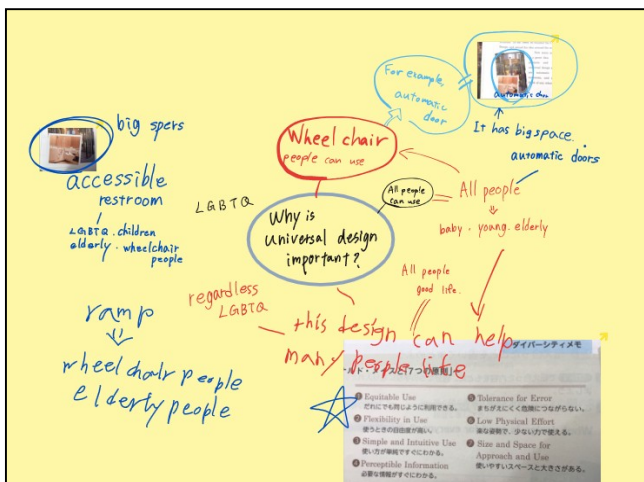
② ICT を活用した授業展開及び対話活動の工夫

今回の研究では主にタブレット端末にあるロイロノートを活用して授業実践を行った。単元の初めに各小集団に一つずつ共有ノートを作成した。この共有ノートの中で学習や発表の準備を進めた。タブレット端末を活用することで生徒自身が簡単に修正や追記をすることができる。さらに、この共有ノートは生徒が個々で作業をしなくても、同じタイミングで確認したり、操作をしたりすることができるのでその場でお互いに意見を出したり、生徒自身で添削や修正を行つたりしていた。また、共有ノートは教員も確認することができるため、各小集団

の進捗状況を確認したり、誤りを見つけたらその小集団に指導しに行ったりすることが容易であった。

また、Unit 5 Read and Think 2で行った対話活動に向かう前の確認と振り返りの時間の中で【図1】のように共有ノート内でワードマッピングを行わせた。確認の時間では黒色で記述させ、振り返りの時間では赤や青で記述をさせた。これにより、子供たちは自分たちの語彙が広がっていく様子を視覚的に捉えながら対話活動に臨むことができた。また、ユニバーサルデザインについて知らない人でも理解できる表現は何かを考えたり、分かりやすく伝えるための言い換えの表現を探したりしながら対話活動に臨むことができた。特に、英語に対して苦手意識をもつ生徒は他の生徒の力を借りながら、単語を組み合わせて会話を行うことができた。

【図1】 ワードマッピングの記入例



5. 成果と課題

本実践における成果○と課題●は次の通りである。

- 小集団での交流を活用した授業展開を行ったことで、生徒が様々な表現や考え方に気付くことができた。これによって、対話活動に自信をもって取り組むことができ、生徒自身も話すことの力を伸ばすことができた実感できた。
- 生徒の意見をアンケートから取り入れながら単元の目標として目的・場面・状況を設定したことで生徒が主体的に課題に取り組むことができた。

○対話活動の中でペアや全体での振り返りの時間を意図的に設けたことで、生徒が文法や表現の違いに気づいたり、より詳しく・分かりやすく伝えるために活かせる表現がないかを考え、そこで見つけた表現を次の対話活動へ活かしたりできた。

○ICTを工夫して用いることで、特に英語に苦手意識を持つ生徒が視覚的に情報を集めて対話活動に臨むことができた。

●小集団の編成を人間関係や学力だけではなく、同じ意見をもつ仲間同士、または異なる意見をもつ仲間同士で編成し、さらに考えを深めたり、広げたりする実践を進める。また、欠席が続く生徒がいた場合、ほかの生徒の負担をどのように軽減するかを考える必要がある。

●今回設定した目的・場面・状況はアンケートを踏まえたものであっても、教員が設定したものである。生徒がより主体的に課題に取り組むために、生徒自身の言葉で目的・場面・状況を設定する機会を設けたい。

●生徒自身が伸ばしたいと考えている力の中に書くことも挙げられていたので、他の領域においても小集団学習を活用した授業展開を実践していく。

6 参考文献

- ・中学校学習指導要領 文部科学省
- ・「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申) 中央審議会